保健師
最前線

自分の保健師像がつかめてきた

与謝野町
尾上　愛さん

「わたし、顔と名前を覚えるのが得意なんですよ」と話してくれた尾上さん。赤ちゃん訪問や健診で受け持った子どものことはだいたい覚えているという。出身地である与謝野町に就職して６年目。初めの年に赤ちゃん訪問をした子どもが５，６歳になっており、その成長ぶりを見るのがうれしいそうだ。

与謝野町では地区分担制をとっており、尾上さんの業務は母子の健診・予防接種から成老人事業と幅広く、悩むことも多いが、やりがいを感じ仕事ができている。

実は、働き始めて数年は、保健師って何？と考えることが多かった。自分のしていることが意味のあることなのか、疑問に感じることもあった。保健指導でも、実際に子育ての経験等がないことで自信が持てず、躊躇することもあった。先輩保健師に「保健師は専門職として知識をもって活動している。子育て経験がないからといって通用しない。」という言葉を聞き、その通りだと感じた。経験がない分、勉強することや先輩の助言、日々の活動で学びを得ることが本当に多い。

２年前の東北大震災の被災地への災害派遣をきっかけに、最近なんとなく自分の保健師像がつかめてきたという。

「最初は自分になにができるのか不安だったんですが、血圧を測ったり、被災者に寄り添いただ話を聞いたりするだけでもいいんだと思いました。この時の経験から自分の中で何かが変わって、保健師としての道が開けた気がします。」

本人は謙遜するものの、普段住民さんと接する中で培ってきたコミュニケーション力が大いに役立ったに違いない。

「なにが変わったとはっきり言えないんですけど、日ごろしてきたことが無駄ではないのだと思うようになりました。」

なかなか数字として結果の表れにくい日々の業務だが、地道な努力こそ住民の支えになることを震災を通じて実感できたのかもしれない。

今年は後輩保健師が入り、プリセプター（指導役）になった。後輩を指導している中で、自分自身がよく分かっていない部分を再認識するなど刺激をもらっている。年齢が近い分後輩のつらい時期がよく分かりサポートしてあげたいとも思う。

最後にどんな保健師になりたいか、たずねた。

「住民さんに寄り添って…、頼ってもらえる存在になりたいですね。」